



ショートコメント

★★★★★

Data 2023-153

# 欲望の翼 デジタルリマスター版 (阿飛正傳/Days of Being Wild)

1990 年／香港映画  
配給：ハーク／95 分

2023 (令和 5) 年 12 月 29 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督・脚本：王家衛 (ウォン・カーウアイ)  
撮影監督：クリストファー・ドイル  
出演：張國榮 (レスリー・チャン)／張曼玉 (マギー・チャン)／劉嘉玲 (カリナ・ラウ)

## 👁️👁️ みどころ

1980 年代に“中国ニューウェーブ”を巻き起こした張芸謀 (チャン・イーモウ) や陳凱歌 (チェン・カイコー) あれば、香港には王家衛 (ウォン・カーウアイ) あり。中国に鞏俐 (コン・リー) や章子怡 (チャン・ツイイー) あれば、香港には張國榮 (レスリー・チャン) や張曼玉 (マギー・チャン) あり。

人口は 100 分の 1 でも、名監督、名スターでは香港は中国 (本土) に負けてはいない。その代表が、王家衛監督 32 歳の時の本作だ。主演は若き日の張國榮、梁朝偉 (トニー・レオン)、劉德華 (アンディ・ラウ)、張曼玉、劉嘉玲 (カリナ・ラウ) らだから、その瑞々しさは日本の 1960 年代の日活における、吉永小百合、浜田光夫、高橋英樹、和泉雅子ら青春スターたちと同じだ。

“一国二制度”が形骸化してしまった現在の香港では考えられない、1980 年代の自由な香港に見る青春スターたちの“輝き”を「ウォン・カーウアイザ・ビギニング」と題された 4K 版で再度しっかり目に焼き付けたい。

———— \* ———— \* ———— \* ———— \* ———— \* ———— \* ———— \* ———— \* ————

◆「閃光のごとき衝撃と陶酔—— ウォン・カーウアイ監督初期の傑作が 4K レストアでスクリーンに蘇る」。そんな謳い文句の中、「制作 30 周年記念公開」「ウォン・カーウアイザ・ビギニング」として、王家衛 (ウォン・カーウアイ) 監督の『欲望の翼 デジタルリマスター版』が公開された。私が同作をはじめて観たのは 2004 年 6 月 30 日だから、約 20 年前だ。

私が中国映画にハマったのは、2004 年 6 月 19 日～7 月 30 日に大阪市西区の映画館シネ・ヌーヴォで開催された「中国映画の全貌 2004」。そこでは、計 44 プログラム 48 作品を上映したので、私はフリーパス券 2 万円を買い求めて、約 30 作品を鑑賞することができた。

◆そこで見たウォン・カーウアイ監督作品は、本作の他、『樂園の瑕』(94 年) (『シネマ 5』231 頁) と『ブエノスアイレス』(97 年) (『シネマ 5』234 頁) の 2 本だが、これら 3 作品

のインパクトは強烈だった。その後、香港映画界を牽引することになった、張國榮（レスリー・チャン）をはじめとする6人の俳優（男女）たちの若き日の姿は瑞々しいが、それ以上に同作を監督した時のウォン・カーウァイは32歳だったというから恐れ入る。

本作に代表されるウォン・カーウァイ監督や、レスリー・チャン、張曼玉（マギー・チャン）、劉嘉玲（カリナ・ラウ）たちの若手スターが活躍する1980年代の香港映画界の姿は、まさに私の中学高校時代に体験した、吉永小百合、浜田光夫、高橋英樹、和泉雅子らの若手人気スターが活躍した1960年代の日活の映画界の姿と完全にダブっている。

『シネマ 5』の本作の評論の中で、私はマギー・チャンの美しさを絶賛するとともに、彼女は「かつての大映の看板女優、藤村志保に似ている」と書いたが、20年ぶりに再度見てみると、それ以上に吉永小百合にそっくり・・・？

◆『シネマ 5』における本作の評論の「見どころ」で、私は「しかし思わせぶりのラストはどうも・・・？」と書いた。また、本文でも＜最後のちょい役（？）の梁朝偉（トニー・レオン）＞の小見出しで「6人の大スターの競演」の最後は、梁朝偉だが、これはちょっといただけない。」と書いた。これは、本作はもともと前後2部作でつくる予定だったが、ロードショー当日を迎えても完成したのは第1部だけで、予算も既に2作分をオーバーしていたため。したがって、この梁朝偉の1シーンは第2部の予告的な意味で挿入されたものの、第2部は完成していないということらしい。つまり、6年後の香港を舞台とした第2部を完成することを予定した本作ラストにトニー・レオンがギャングラーとして登場した1シーンはその予告だったわけだが、そのトニー・レオン扮するギャングラーが主人公として登場する映画は結局製作されず、公開されなかったわけだ。なお、ウォン・カーウァイ監督の心の中では、その第2部として作られた映画が『楽園の瑕』だが、その舞台は中国古代の砂漠地帯となっているから、一体これは・・・？

◆本作はデジタルリマスター版だが、新たにパンフレットが作成され、販売されている。そして、そこにはウォン・カーウァイ監督×暉峻創三のインタビュー「飛び続ける鳥のように」（1991年東京国際映画祭で来日した際のインタビュー）があり、その中で第2部のことについても触れている。それによると、「60年代を舞台とした作品ということで、それにふさわしい撮影場所を見つけるのが大変だったのと、オールスター映画で役者たちのスケジュール調整に手間取ったのとで大幅に遅れ、結局、クリスマスのロードショー時期までには第一部しか仕上げられなかった。第二部用にほんの少し撮影した部分もあるけど、大部分はこれから。第一部を観た一般観客の反応が良くないので、脚本も変えようと考えている・・・。。。」ということだ。もっとも、このインタビューは『香港電影世界』（暉峻創三著・1997年）からの転載だから、2023年の今、『欲望の翼』第二部製作の見込みは全くなし・・・？

2024（令和6）年1月10日記